慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二〇一五年度ベイティン遺跡(パレスチナ自治区)における考古学的発掘調査
Sub Title	The 2015 archaeological excavations at Beitin, Palestine : preliminary report
Author	杉本, 智俊(Sugimoto, Tomotoshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2016
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.86, No.3 (2016. 10) ,p.73(269)- 85(281)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20161000-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

二〇一五年度　ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査

杉本智俊

慶應義塾大学西アジア考古学調査団は、二〇一二年度よりパレスチナ自治区ベイティン村で考古学的発掘調査を行っている[1]。この調査は、同自治区観光考古省との共同調査である。

ベイティン村は、エルサレムの北一七キロに位置しており、聖書のベテルの町と同定されている（図1）。村にはさまざまな遺跡が散在しているが、本年度は、特に村の南東部に位置するブルジュ・ベイティン遺跡で発見されたビザンツ時代の教会堂遺構の性格を把握することを主眼に調査を進めた。

一．ブルジュ・ベイティン遺跡と族長記念教会の伝承

聖書は、このベテルで族長アブラハムが祭壇を築いたこと、ヤコブが天の梯子の幻を見たことを伝えており（創世記十二章八節、二八章十―十九節）、ビザンツ時代にはこれらの出来事を記念した教会が建設され、この地が巡礼地になったことが知られている。ヒエロニムスは、紀元三九〇年にエウセビウスの『地名録』を翻訳し、その注釈でベテルにヤコブの幻を記念した教会があったことを記している（*Onomasticon* 7 : 2–4 ; Freeman-Greenfille 2003, 13）。また、マダバ地図と呼ばれるモザイク床（紀元六世紀）にも、ベテルの教会が示されている[2]。

ベイティン村には、ビザンツ時代の列柱道路や大型の貯水槽が残っており、泉のふもとには教会も知られている。この教会堂は十字軍時代のものであることが確認されている（Pringle 1993, 104f ; Koenen 2003, 66）が、そ

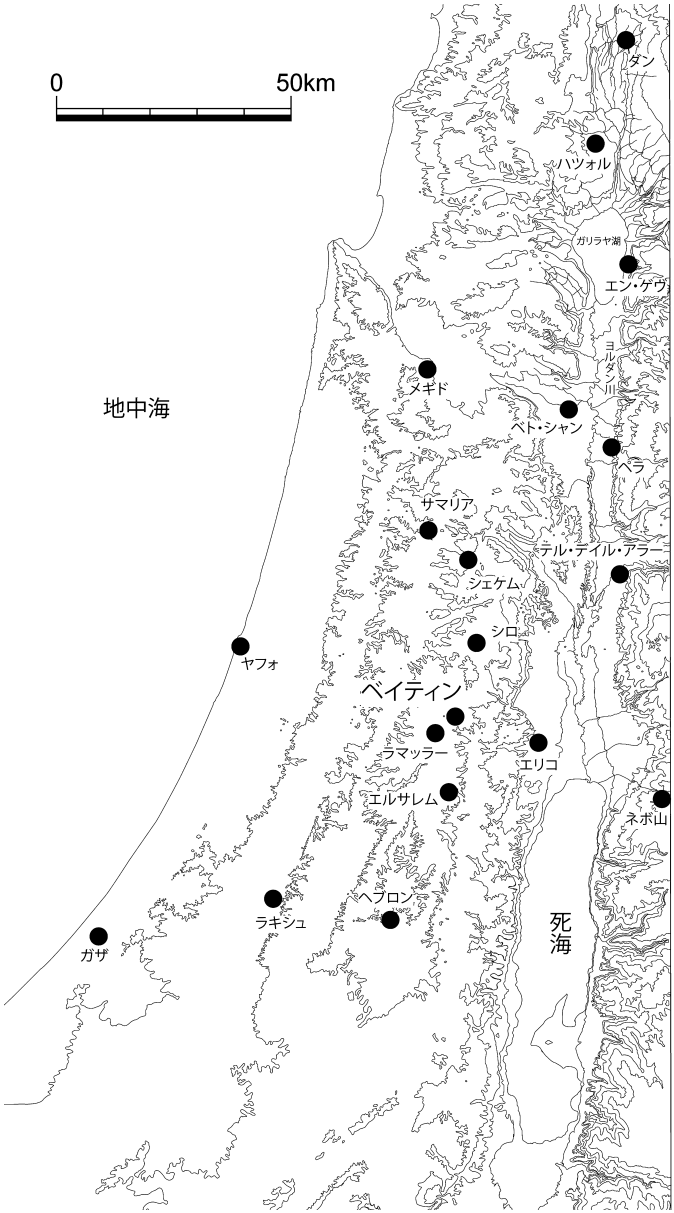

図１　ベイティン遺跡の位置

の下にビザンツ時代の教会堂があった可能性も否定できない。ただ、その積極的な証拠はなく、一八八三年にこの地を踏査したコンダーとキッチナーは、むしろブルジュ・ベイティンこそヒエロニムスが記録した教会があった場所だとしている（Conder and Kitchener 1881）。そこには塔だけが残っていたが、それは修道院が造り変えられたものだと指摘した。アブラハムはベテル「の東」に祭壇を築いたとされており（創世記十二章八節）、四世紀に訪れた「ボルドーの巡礼」もベテルから一マイルほど離れた所にヤコブが寝た所があったと伝えているからである。[3] 現在でも村人たちは、この場所がアブラハムの祭壇の場所だと信じている。

しかし、アブラハムの祭壇とヤコブの幻の場所が同じ所だとビザンツ時代に考えられていたかどうかは確かでなく、これまでブルジュ・ベイティン遺跡は発掘されたことがないので、こうした点は確かめることができないできた。慶應隊は、二〇一三年度の調査で、この地区の塔の周囲に大型のキリスト教関連施設が存在することを確認した。そこで、本年度はそれが教会なのか、もしそうなら、どのような性格の建築であるのかを調査し、この地における伝承がどのように発達したのかを解明することを試みた。

二．教会堂側廊部分の調査

二〇一三年度の調査では、塔の周りに二重になった外周壁が存在すること、その西側中央に円柱にはさまれた石敷きの玄関が存在することが確認された。また、その南側の部屋では、ブドウなどの模様のついたモザイク床も検出された。二〇一五年度は、この西側の壁から塔に至る南側の壁沿いの地区を調査することにした。調査開始時点では、まだこの建物の規模も構造も判明しておらず、入り口の内側に修道院の宿坊か教会堂のアトリウム（中庭）があり、その奥に小さな会堂が存在する可能性もあったからである。しかし、調査の結果、南側の壁全体に沿って側廊が存在し、この建物は全体でひとつの大きなバシリカ式教会堂となっていたことが判明した。

南側の壁は、西端の三メートルほどだけが二列の切り石で造られた元来の教会堂の壁のままであったが、それより東側は後代に石一つ分内側に拡張されていた。そのため、会堂の南端部分は、拡張された壁の下にもぐってしまっていた。また、会堂の床と思われる遺構の上には、二本の異なる水路、石灰釜などの遺構が載っていた（図

図２　側廊部分の床とその上に位置する水路

図３　側廊のモザイク床

2)。

南側の壁沿いでは、モザイクの床が確認された。保存状態のよい箇所は限られているが、多彩色の組み紐紋で、ゲリジム山のビール・エル・ハマム修道院出土のものとよく似ている（図3、Taha 2015）。モザイク床の内側（北側）は、玄関部分と同様の長さ一メートル以上ある石灰岩の石敷きが全面に敷かれていた。ビザンツ教会の身廊部分はモザイクになっていることが多いが、近くのタイベの教会やネゲヴのナバテア人の教会も石敷きになっているので、今後比較検討すべき課題だと思われる。

モザイク床（側廊）と石敷きの床（身廊）の間には、幅約七五センチ、高さ約十センチの細長い切り石の列が並んでいた（図4）。二箇所石のない箇所があったが、表面は同じ高さにそろえられていた。おそらくこれはスタイロベイト[4]で、その上に木製の列柱が載っていたのであろう。この近くでは石柱が一本倒れていたが、もしこれが載っていたとすると柱台が必要となる。この点も研究課題である。また、もしここに列柱があったとすると、身廊部分の幅が非常に広くなるので、もう一列その内側に列柱が必要で、五廊式の構造であったと想像される。しかし、この可能性も今回の調査では確認できなかった。

図4　南側の壁と側廊

さらに、本年度は、建物の北

図５　北西角の調査

西角部分の調査を行い、その位置を確認した（図５）。空中写真によると、建物の北側にほぼ並行に二本の壁が走っており、どちらが教会堂の外壁かたしかでなかったからである。結果として、外側の壁は会堂の床面から浮いており、石積みも雑なので、後付けのものであり、内側の壁が元来の教会堂の壁であったことが確認された。

三．アプスの発見

教会堂の奥、遺跡中央部の塔の北側では、アプス（内陣）が発見された。その北隣にクリプトか聖餐準備室と思われる小部屋も検出された。

アプスは直径が七メートルほどの半円形で、身廊にむけて祭壇が突き出しており、側廊より約六〇センチ高くなっていた（図６）[5]。アプスを形成する切り石の側面には周囲をなめらかにし、中央を四角く粗く削る装飾がつけられていた。アプスの内側は、おそらくかなり遅い時代のものと思われるイスラム教徒の墓によって壊されていたが、そうでない部分には白一色のモザイク床が残っていた。また、その上には漆喰や石敷きも部分的に残っており、再利用時の様子を反映していたと思われる。祭壇の淵の石の上には、大きな魚の絵が彫られており、ざ

図６　上から見たアプス

図７　アプスに隣接した小部屋

くろや椰子の木などの模様が彫られた鴨居の石、内陣障壁のスクリーン、ポストの断片も調査区全体から複数検出された。

アプスの北側には、大きな切り石ブロックで造られた小部屋が確認された（図7）。この部分の調査は終了していないが、クリプトか聖餐準備室だと思われる。もしこの教会堂が伝承されたものだとすると、アブラハムの祭壇、ヤコブが寝た石、無名の預言者の墓[6]などが、保管されていたのかもしれない。ただし、現在の所、そのようなものは確認されていない。いずれにしても、初期ビザンツ時代の教会堂の構造にはまだ流動的な面があったので、この点は今後の調査の資料となるであろう。

四．全体構造の把握

以上の調査成果を総合すると、この教会堂は、東西約四〇メートル、南北約二八メートル、おそらく五廊式の非常に大きなものであることがわかった（図8）。入り口部分は、すでに知られていたように三連式の門となっており、切り石細工で装飾されていた。ナルテックスや側廊はモザイクで装飾されており、身廊部分は大きな石敷きとなっていた。このように大きく、手の込んだ教会堂は、単に地元の必要に答えるためのものではなく、大規模な巡礼のために造られたものである可能性が高い。

残念ながら、碑文はひとつも見つからなかったが、この場所はベテルの東に位置しており、アブラハムを記念するものだと考えて間違いないであろう。ヤコブの幻を記念する教会堂が同じ場所であったかどうかはたしかでないが、この教会堂が両方の出来事を記念していた可能性もある。実際、伝承はすべてひとつの教会堂にしか言及していない。もし修道院が付属していたのであれば、この周囲に位置していたであろう。

この遺構の厳密な年代は、まだコインや土器の研究が進んでいないので確定できないが、もしこれが伝承された会堂だとすると、すでにビザンツ時代の最初期、四世紀末に立っていたこととなる[7]。ローマ帝国がキリスト教化された際、さまざまな聖書の事跡の場所に教会堂が建設されたことが知られている。これもその一貫だったのではないだろうか。近接するタイベ（イエスが滞在した「エフライムの町」と同定されている）の教会堂も発掘され、四世紀末の建設とされている[8]。

図８　教会堂の推定復元図

五．教会堂と塔の関係

本年度の調査では、塔自体の発掘調査も行われ、教会堂との年代関係がはっきりしてきた。すでに二〇一三年度の調査で、この塔が教会堂の石敷きの床を壊して立っていることが確認されていたが、一部石が噛み合わされている部分もあり、その関係は不確かであった。しかし、その後、噛み合わせ部分から採取された炭化物の年代が十一世紀のものであることが確認された[9]ので、この塔は十字軍時代の建築である可能性が高くなっていた。

本年度、塔の内側を調査したところ、この建物の少なくとも二階部分は、一つのゆるやかに尖ったアーチに支えられた構造であることがあきらかになった（図9）[10]。また、壁は一メートル以上の厚さがあり、外面と内面に切り石を用い、その間に漆喰で固めた自然石を入れる構造となっていた。このような建築技法は、十字軍時代に典型的なものであることが知られている[11]（Boaz 1999 ; Pringle 1983, 1994）。この塔は、目立つ部分に十字紋のはいった石を意図的に組み込んでおり、位置的にも、すでに破壊されていた教会堂のアプス部

図 9　塔の北壁（内側から見る）

図 10　塔とアプスの関係

分を避けるように建てられていた。キリスト教信仰を大切にする人々によって建設されたと考えられるであろう（図10）。

おそらく四世紀に建てられた教会堂は、ササン朝ペルシアあるいはイスラム侵攻の際に破壊されたが、その後、十字軍時代になって城塞に建て直されたものと考えられる。その際、会堂の壁は中庭部分を囲む外周壁として再利用され、水路なども設けられたようである。

（本報告は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（A）課題番号24251015（研究代表者、杉本智俊）による成果の一部である。）

参考文献

Avni, G. 2014 *The Byzantine-Islamic Transition in Palestine : An Archaeological Approach*, Oxford : Oxford University Press.

Boaz, A. J. 1999 *Crusader Archaeology : The Material Culture of the Latin East*, London and New York, Routledge.

Clark, V. A., and Parker, S. T. 1987 "The Late Roman Observation and Signaling System," in S. T. Parker ed., *The Roman Frontier in Central Jordan : Interim Report on the Limes Arabicus Project, 1980–1985*（BAR 340）, Oxford : British Archaeological Reports, 165–81.

Conder, C. R. and Kitchener, H. H. 1881 *The Survey of Western Palestine : Memoirs of the Topography, Orography, Hydrography, and Archaeology*, London : Palestine Exploration Fund.

Donner, H., 1995 *The Mosaic Map of Madaba : An Introductory Guide*（Palestina Antiqua 7）, Kampen, the Netherland : Pharos.

Freeman-Grenville, G. S. P., 2003 *The Onomasticon by Eusebius of Caesarea, Palestine in the Fourth Century A. D.*, Jerusalem : Carta.

Koenen, K., 2003 *Bethel : Geschichite, Kult, und Theologie*（OBO 192）, Fribourg and Göttingen : Academic Press and Vandenhoech & Ruprecht.

McClure, M. L. and Feltoe, C. L., 1919 *The Pilgrimage of Etheria*, London : Society for Promoting Christian Knowledge.

Parker, S. T. 1986 *Romans and Saracens : A History of the Arabian Frontier*（ASOR Dissertation Series 6）, Winona Lake, IN : Eisenbrauns.

Pringle, D. 1993 *The Churches of the Crusader Kingdom of Jerusalem : A Corpus*, vol. 1, A–K（excluding Acre and Jerusalem）, London : Cambridge University Press.

Pringle, D. 1994, "Towers in Crusader Jerusalem," *Château Gaillard : Ētude de Castellologique medieval, XVI, Actes du Colloque international tenu à Luxembourg*（*Luxembourg*）, *23–29 août 1992*, Caen, 335–50 ; D. Pringle, 2000 *Fortifica-*

tions and Settlement in Crusader Palestine, Aldershot : Ashgate, 1–25 に再録。
Pringle, D. with the contributions by Leach, P. 1983 “Two Medieval Villages North of Jerusalem : Archaeological Investigations in Al-Jib and Ar-Ram,” *Levant* 15, 141–177.
Taha, H. ed. 2015 *The Monastery of Bir el-Hamam in Beit Feslasteen, Mount Gerizim*, Ramallah : Department of Antiquities and Cultural Heritage.
Wilkinson, J. 2006 *Egeria's Travels*, Oxford: Aris & Phillips.
杉本智俊　二〇一四年「ベイティン（ベテル）遺跡における考古学的調査の課題」『聖書学論集』四六号、六一―八二頁。
杉本智俊　二〇一六年（印刷中）「パレスチナ自治区ブルジュ・ベイティン遺跡の塔の機能と年代―ビザンツ時代、十字軍時代の塔との比較を通して」『古代オリエント研究の地平―小川英雄先生傘寿記念論文集』リトン。
杉本智俊・間舎裕生　二〇一三年「二〇一二年度ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的一般調査」『史学』第八二巻第一、二号、一〇五―一二七頁。
杉本智俊・西山伸一・間舎裕生　二〇一三年「二〇一三年度ブルジュ・ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』第八三巻第一号：五七―八七頁。
杉本智俊・菊池実　二〇一四年「二〇一三年度　ワディ・ワタヒーン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』第八三巻第二、三号、一一九―一三八頁。
杉本智俊・菊池実、間舎裕生　二〇一五年「二〇一四年度ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』第八四巻一―四号、五二三―五三六頁。

註

（1）これまでの調査に関しては、杉本・間舎（二〇一三年）、杉本・西山・間舎（二〇一三年）、杉本・菊池（二〇一四年）、杉本・菊池・間舎（二〇一五年）参照。また、調査上の課題については、杉本（二〇一四年）参照。

（2）Donner（1995）には、モザイクの図面が添付されている。おそらくベイティンの周辺には多くの聖跡があったため、教会は図で描かれておらず、他の地名とともにBEΘHΛと記されている。

（3）「ボルドーの巡礼」については、CenturyOne Foundation のホームページ（http://www.centuryone.com）に A. Stewart による翻訳（一八八七年）を見ることができる。尼僧「エゲリアの巡礼」の記録は、Wilkinson 2006 に原文の翻訳と丁寧な注解がついている（McClure and Feltoe [1919] も参照）。ブルジュ・ベイティン遺跡は、実際にはテル・ベイティンから直線距離で八百メートル程度しか離れていない。そのため、さらに遠くのヒルベト・マカーティル遺跡をこの教会だとする可能性も指摘されている（Koenen 2003, 66–68 などを参照）。

（4）教会堂の遺構の解釈については、早稲田大学の益田朋幸教授から個人的に多くの示唆をいただいた。記して感謝したい。ただし、最終的な判断は筆者の責任で行って

いる。

(5) 身廊部分は、十分発掘がされていないが、おそらく側廊と同じ標高であると考えられる。

(6) 列王記上十三章一―三二節参照。「ボルドーの巡礼」も、ヤコブの幻と合わせて、この預言者について言及している。

(7) ヒエロニムスの注釈やエゲリアの訪問は、それぞれ四世紀末だとされており、その時にはすでにベテルの教会が存在したことが明言されている。

(8) このほか、ジフナ（ローマ時代のゴフナ）の町でも未発掘のビザンツ時代の教会の存在が知られている。

(9) 測定は株式会社パレオ・ラボに依頼した。資料名はPLD-28934、A地区ローカス121出土で、バスケット番号は1046である。正確な暦年較正年代は、1085年–1124年cal AD（38.6%）、1068年–1155年cal AD（69.4%）である。資料はオリーブの木片なので、この年代は実際の使用年代より若干古い時期を示している可能性がある。

(10) 二階部分の床は残っておらず、塔はかなりの高さまで落石で埋まっていた。

(11) この遺構の性格に関しては、筆者が別稿（杉本　二〇一六年）で詳しく論じている。